

ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル

「ゾルダートン・ツァイトウング」紙上の二人

長谷川 淳基*

Robert Musil und Alfred Kerr
in der
„Soldaten-Zeitung“

Junki HASEGAWA

I 始めに

1910年11月と、1911年1月、それまで平行して書き進めてきた二つの作品、すなわち『愛の完成』と『静かなヴェロニカの誘惑』をムージルはそれぞれに完成させた。一息つくこともせず、ムージルは雑誌「パーン」に載せるエッセイに取り掛かった。執筆に専念しているかに見えるムージルであるが、身辺を取り巻く状況は、必ずしも落ち着いたものとは言えなかった。この時期ムージルは、結婚、就職という人生上の重大問題に直面していた。結果、就職については1911年3月付でウィーン工科大学図書館勤務が決まり、また結婚についても、ムージルの交際相手マルタとその夫エンリコ・マルコヴァルディとの離婚問題が片付いたことにより、ムージルとマルタはウィーンⅢ区のプロテスタント教会で4月15日、結婚式を挙げた。

マルタとの結婚生活に関しては、取り立てて困難な問題など生じなかったが、図書館勤務については、喜びを見出すことはできなかった。図書館員としてのムージルは、健康上の理由から繰り返し長期の休暇を取り、この時間を原稿執筆に当てていた。そうしたムージルに幸運が訪れた。ドイツきっての老舗出版社であるベルリンのフィッシャー出版社、その看板雑誌「ノイエ・ルントschau」の編集者のポストを手に入れたのである。1913年2月1日付の契約であった。しかしながら時代の状況は加速度的に深刻の度を増していた。ムージルの運命も、その流れに呑み込まれることになった。翌1914年7月28日、オーストリアはセルビアに戦線を布告した。第一次大戦が始まったのである。

この第一次大戦期、ムージルとケルの間にはやはり注目に値する交流があった。とは言え、砲弾が飛び交い、戦火が燃える中で二人が顔を合わせ、共通の戦争体験を持ったとい

* 人間関係学部 臨床心理学科

うようなことではない。それどころか、第一次大戦の時期、二人は一度も顔を合わせたことはなかった。

注目に値するこの二人の交流とはこの時代、ヨーロッパアルプスの奥深い町で発行されたオーストリアの戦時新聞すなわちゾルダーテン・ツァイトゥング紙に載ったムーゼルとケル、二人それぞれの書き物にまつわるそのことである。二人は何を表現し、何を訴えかけたのか。この特別な時代に、二人はそれぞれにどのような人物であったのか。この古茶けた、小型版の新聞のページを繰り、いわば「一面のもやと霧の中から立ちのぼる」二人の人物の姿を捕らえること、これが本論の目的である。

II ゴットリーブ作の詩「ダヌンツィオによる^{オード}頌歌・第六景」

1916年6月15日付チロル・ゾルダーテン・ツァイトゥング紙の別刷り「文芸版付録」に奇妙な詩が掲載された¹⁾。

ダヌンツィオによる^{オード}頌歌・第六景

I.

イギリスの指揮下に入り
一年ちょうどが経過したこの戦争
開戦の記念日を祝うため
皆、それぞれのねぐらへ帰ろう！

II.

霧が出れば、見通しはきかない——
それで、俺の姿も人目につかない
そら、タバコをふかせ、ほら、葉巻もふかせ！
前進じゃない、退却だー

何と悲しい記念日だ
マンマ・ミーア、お助けー
イタリア軍は列をなして退却
これぞ、ゴルゴンゾーラの蛆虫の行軍

III.

我らが過ち、我らが愚かさ！
チロルの全土、ゴリーツィアの全土
あの時ならばプレゼント、^{たが}無料でもらえたものを——
素直に受け取っておけばよかった

ああ、ティツィアーノ！ ああ、ラファエロ！
何というこの不運！

ああ、ジュリア、アーダ、イーダ！
講和だ、講和を結ぼう！

ゴットリーブ

奇妙とは、一つにはタイトルであり、もう一つは文体である。

詩のタイトル「ダヌンツィオによる^{オード}頌歌・第六景」であるが、これはこの詩がゾルダーテン・ツァイトゥングに掲載された時から遡ること4年前、1911年5月23日、パリ・シャトレ座で初演されたダヌンツィオ台本、ドビュッシー作曲の舞踊付き霊験劇『聖セバスチアンの殉教』五景、に因んでいる。

霊験劇『聖セバスチアンの殉教』は、中世の聖セバスチアン伝説を扱った作品である。聖セバスチアンとは、「三世紀頃のローマのキリスト教殉教者、聖人。伝説によると、ディオクレティアヌス帝に愛されたローマの近衛将校で、ひそかにキリスト教徒となり、殉教に赴く信者を激励したために、杭に繋がれ矢を射られて殉教したが、奇跡によって蘇生し、帝のもとに赴いてキリストの福音を伝えたため即座に打ち殺された。[……] 矢に射られた美しい若者として、聖画の好題材となった。射手および銃工の、また疫病に対する保護聖人」²⁾である。ダヌンツィオがこの素材を、中世霊験劇の形で作品化することについては、1910年末にソルボンヌ大学の演劇史研究家ギュスターヴ・コーアンの手ほどきがあった³⁾。そして、半年後にはダヌンツィオの本とドビュッシーの曲が完成していた。初演は、以下で触れることになるが、大きな話題となった。「オード・第六景」の詩の内容を見るに当たって、先ず第一次大戦について整理しておこう。

第一次大戦は1914年7月、オーストリアの対セルビアへの宣戦布告で始まったが、イタリアとの間は、領土問題を巡って久しく緊張関係が続いていたものの、原則的には未だ1882年以来のオーストリア・ドイツ・イタリアによる三国同盟が有効であった。この開戦から10ヵ月後、1915年5月23日、イタリアはオーストリア側が示した最終的な譲歩——トリエステを除いて、イタリアの要求をすべて、とはすなわちこの「オード・第六景」にもある南チロルとゴリツィアなどイゾンツォ川流域の東側地域すべてについて、その領有を認める、との案——を拒否して、オーストリアに戦争の開始を告げた。イタリアは、すでにイギリスとの間で領土問題に関する密約を結んでおり、これによると、戦後イタリアがトリエステをも領有することが確認されていた。

そしてさらに一年が経過した。1916年5月である。ゾルダーテン・ツァイトゥング紙が発行されている地域、インスブルック、チロル地方のオーストリア側防衛ラインは強固であり、イタリア側は思い通りに領土を「回収」できてはいなかった。

ゴットリーブの詩「オード・第六景」が発表されたのはこの時期であった。詩は、イタリア側陣営を代表するダヌンツィオの聖セバスチアンが、一年来の参戦を嘆く内容になっている。

イタリア語、ドイツ語、イディッシュ語の混成語で書かれている点の理解のためには、さらにもう一つ、『セバスチアンの殉教』初演にまつわる一連のエピソードについて知らねばならない。

1911年5月、ダヌンツィオが『聖セバスチアンの殉教』を当時滞在していたパリで初演した際、この作品は、上演される数週間前からパリー都に止まらず、全ヨーロッパの話

題の的になっていた。矢で射抜かれる際の裸身が美しいことで知られるキリスト教聖人を、舞台の上で女性が演じるらしいという噂が、世間の関心を引いたのであった。こうした関心の高まりは、初演を前にパリ大司教が、この上演を見るカトリック教徒に対しては破門を言い渡すと布告したことにより、一挙にスキャンダルに発展した。騒動はエスカレートして、ローマ教皇がダヌンツィオの全作品と、そして何とドビュッシーの音楽までもインデックスに載せるに至った⁴⁾。

ダヌンツィオは、恋人ドゥーゼとの関係が終わった後、住まいを巡る金銭沙汰が理由で1909年にイタリアを離れ、パリへ赴いた。パリにあっては、アラビアンナイトさながらの享楽的な生活にふけていたようだ。そしてその「交際相手」の中には、芸術愛好家で興業師でもあったモンテスキウ伯爵も含まれていた。エレガンスの化身とも称される女性舞踏家イーダ・ルビンシテインは、モンテスキウ伯爵にとっても「すらりと背が高く、優雅で、動物のような性的魅力を宿した少女にして少年」⁵⁾であり、彼の崇拜の的であったのだが、このイーダをダヌンツィオに引き合わせたのは、ダヌンツィオの奔放・多情振りにいらだったモンテスキウ伯爵その人自身であった。ダヌンツィオ、イーダ、モンテスキウ伯爵の間は、その後当然のことながら、錯綜したものになった⁶⁾ことは、伝えられているとおりであろうが、ダヌンツィオのパリでの女性遍歴はモンテスキウ伯爵の目論みの通りにびたりと止んだ。とはすなわちダヌンツィオは今、新たなミューズを見出し、作家としての活動を再開したのであった。裸体美によって知られる伝説の聖セバスチアン、傍らにいる男性の恋人と瘦身の女性舞踏家。ダヌンツィオの新たなアバンチュールの局面は『聖セバスチアンの殉教』五景に結実した。ドビュッシーは、テキストに宿る宗教的靈感に打たれ、こちらも一気に曲を書き上げた。

女流舞踊家イーダ・ルビンシテインはロシアのユダヤ人富豪家の家に生まれた。1909年、ディアギレフのロシア・バレエ団結成に参加、この年と翌1910年のパリ公演で喝采を浴び、その後すぐに自分のバレエ団を組織した。そして、彼女みずからが踊るためにダヌンツィオとドビュッシーに作品を依頼した。その結果ダヌンツィオが『聖セバスチアンの殉教』を着想したのであった。

パリ大司教がカトリック教徒にこの音楽劇の観覧を禁止した点について述べよう。理由の一つは、イーダ・ルビンシテインである。彼女はユダヤ人であった。ルビンシテイン家がロシア屈指の富豪であることも手伝って、これは衆目の知るところであった。もっとも、パリ大司教は、当然のことながらこの点について公に発言したわけではない⁷⁾。理由の二つ目は、これもイーダに関連することであるが、裸体美によって知られる聖セバスチアンを、女性舞踊家が舞台上で演じる点である。瘦身の彼女が男性を演じること自体は、これが全くの不自然というものではなかったはずだ。モーツァルトのケルビーノは、優に百年以上昔の1786年以来、人々の前で着替えをしているし、つい今しがた1911年1月には、オクタヴィアンが元帥夫人のベッドから這い出して来たが、パチカンは人目につくほどに眉をひそめることなどはしていない。パリ大司教、ローマ教皇がこの作品に激怒した真の理由はこうであろう。男女の別を問わないダヌンツィオの性的嗜好が、よりによって聖セバスチアンという人物を通して舞台の上であからさまにされるとき、もともと聖セバスチアンには付いて離れない含意——美しい裸体の青年——というものがあり、それゆえに大司教としては、それが自分の側の、いわばタブーに触れることのように思われ

で、心穏やかではおれなかったに違いない。以上が1911年5月、『聖セバスチアンの殉教』初演時のパリの状況である。

ゴットリーブ作の詩において、混成語を話しているのは聖セバスチアンである。詩の作者について言及しなければならない。

この詩の筆者はファーストネームだけを記しているが、当然のことながら分る人にはこれで十分だったのである。ベルリンを代表する新聞の一つ「ターク」紙の看板批評家アルフレート・ケルは、すでに戦前から長く同紙にゴットリーブの偽名で風刺詩を書いていた。例の1911年1月、雑誌「バーン」を舞台に、警察権力に鋭く対立する姿勢を示して大衆の人気を獲得していたケルは、このときすでに、おそらくは彼の論陣の維持・強化の戦略として、また彼の美意識に関連する理由から、この偽名を使って頻繁に風刺詩を書いていた。文章家として二つの名を使い分けていたのである。ゴットリーブがケルの偽名であることについては、ずっと後の時代になって、カール・クラウスがこの話を持ち出して、あるいは掘り起こしてと言おうか、自らの雑誌「ファッケル」に大々的に書いた。そしてその際にケル本人も不承不承この事実を認めている。クラウスとケルについては、後にあらためて言及することになる。

さて、以上の理解に立って、詩を見ることにしよう。ケルはこの奇妙な詩を何のために、誰に向けて書いたのか？ 戦意の高揚、戦っているドイツ側陣営への応援のためということは間違いない。しかし、三つの言語については？ その内容は？

『聖セバスチアンの殉教』のパリ初演に先立つことちょうど一年前の1910年5月、ロシアバレエ団がベルリン公演を行なった際に、イーダはクレオパトラを演じた。ケルも人の子、やはり彼女の脚の美しさに打たれ、感嘆のため息を詩に書きとめている⁸⁾。そして翌年、『聖セバスチアン』の初演の年1911年——ケルはこの年の初め、ベルリン警察署長ヤーゴを相手に論陣を張っていた。表現の自由に対する権力側の圧力への抵抗であった。『聖セバスチアンの殉教』初演は、この騒動が一段落したその直後の時期にあたる。パリでのスキャンダルの詳細の察知、表現する側と制止する側双方の隠れたスキャンダラス性、つまりはダヌンツィオの幾重ものいかがわしさ、そしてみずからのやましさを隠蔽するために芸術を弾圧する権力——こうしたことを1911年当時、ドイツで最もリアルに、敏感に自らの問題とした人物は、他ならぬアルフレート・ケルであった。

初演当時パリ大司教は、イーダがユダヤ人であることに不快を感じた。ケルは今1916年5月、これを忘れていない。「オード・第六景」での聖セバスチアンのイディッシュは、初演当時パリ大司教がとった措置に対するケルの、怒りを蔵した笑いである。イタリア語が混ざっていることについては、詩の内容がイタリア側陣営の嘆きであることと、ゾルダーテン・ツァイトゥングの発行地域の言語特性もケルの意識にはあったと思われる。そしてもちろん、なによりもダヌンツィオへの敵がい心とからかい。例えばケルの懇意の新聞、ベルリンのターク紙は、イタリア参戦当時にダヌンツィオが発した檄文の一節を伝えている——「……ダヌンツィオの声明はこう結ばれている『ジェノアの民よ、立ち上がれ！ イタリア人よ、立ち上がれ！ きょう、われらがすべての武器を手にして戦わねば、祖国は失われてしまう！ いざ、イタリアの殉教者たち！』」⁹⁾。頭の決闘傷をことさら強調するために、坊主頭になっている男。自ら飛行機でウィーンの空に侵入し、ピラを撒いて得意満面の男。「オード・第六景」が載る直前の号のゾルダーテン・ツァイトゥング

には、ダヌンツィオの小さな人形が処刑台に吊るされている写真が載っている。大衆の煽動を目的として、どこか芝居がかった奇矯なダヌンツィオの振る舞いは、ドイツ・オーストリア側にこうした子供じみた報復を誘発した。政治活動家ダヌンツィオに対するこの種の感情は、この時代のドイツ側陣営に共通のものであった。

ダヌンツィオに対してケルは、そうした政治行動への反感の念の他に、いわば個人的嫌悪感があったと考えられる。ケルは生涯、女性をいたわり、常に妻と、そして家庭を愛したロマンチックな常識人であったからである。

ケルは、かつてエレオノーラ・ドゥーゼに捧げて一書を著した。ムーゼルがこれを読み、ケルという批評家を知るきっかけとなった『演劇術』である。ドゥーゼへの絶対の帰依に基づいて書かれたこの本の他にも、ケルはいくつもの劇評、エッセイで熱烈にドゥーゼを称えた。作家ダヌンツィオがヨーロッパ中に聞こえる名声を獲得したのは、このドゥーゼを得たからであった。

そのダヌンツィオは今1911年5月、パリにあって、新たなミューズのためというだけでなく、あろうことか男女二人の情人の間にあって、この局面ならではのアイデアを得て『聖セバスチアンの殉教』を物した。こうした面では道德家であったケルが何も思わなかったとは想像しがたい。

ケルは今、イタリア参戦一年が経過した時期、偽名によりダヌンツィオを、イタリアを、かつての大司教を、そしてイーダをも一まとめにして笑い飛ばし、叩いた。イーダであるが、戦争が始まった後は私財を投じて傷病兵のための病院を作り、自らも看護にあたる一方で、舞台にも立ち、これにより得た収入は戦費に寄付するなど、フランスのために、そしてロシアのために、英雄的とも言える戦争協力を行っていた。その他、「オード」終節のラファエロは『聖セバスチアン』に登場する天使であり、ヴェニスゆかりのティツィアンをこれへ掛け、ジュリア Giulia はヴェニスの隣接地域。アードは、イーダとの語呂合わせと思われる。この詩のケルは大衆と共に、大衆の先頭に立って、怒りを笑いに転化する中で、彼の天稟を一閃させた。

III ケルの詩

翌1917年2月、ゾルダーテン・ツァイトゥング紙にケルの実名の詩が載った。

戦いが行く……

戦いが行く……重い足取りで、

ビスワ川の岸辺を？ ヴァスゲンヴァルトのコルを？

静寂が語る。幾日も。

我々には、何も分らない。しかし、はっきりと分る。

呼び声が駆ける。朝のしじまの中を。

全ての夜を抜け。故郷に向かう。

囁くような呟きが膨らみ、

君たちの血から、我々の胸へ。

雄叫びが響く。銃声が轟く。
我々の額が、射抜かれる。
人知れぬ確かなる川が流れている、
君たちの額から、我々の額へと。

死者を弔う風が吹く。
我々は一人残らず、確たる一步を進む。
こして、戦場から遠く離れた我々は、
共に戦い、共に死す。

アルフレート・ケル¹⁰⁾

この詩には何が書かれているのか。戦場から遠く離れた大都会の書斎にあって、書き物机を塹壕に見立て、そこに身を隠しているずい臆病者——カール・クラウスはこの詩について、ケルをあざ笑った。が、そうした詩であろうか。戦争に行けず、後に残る者から前線にある者への精一杯の共感の表明、参加していない者の悲哀・無念、無条件の憧れ、こうしたものがなぜこの詩にも感じ取れないことがあろう。この点に関しては、少し別のことを書かねばならない。

大戦勃発と同時にムージルが従軍した1914年8月以後のことである。オーストリアによるセルビアへの宣戦布告の三週間後、8月20日にムージルはリンツで入隊し、9月からは南チロルで国土防衛の任にあたることになった。1880年生まれムージルは34歳であった。

チロルに着いて間もなくムージルは勤務先社長夫人ヘートヴィッヒ・フィッシャーに宛てて絵葉書を送っている。この絵葉書は、何とムージルと妻マルタの連名で差し出されている。

[消印 ゴマゴイ 1914年10月10日]

拝啓 親愛なる奥様。私どもは、今なお高所の山地に留まっていますが、全くもって素晴らしい真夏の日々に恵まれております。心からのご挨拶を、また、ご主人様にくれぐれも宜しく。マルタ・ムージル

お手にキスを、そして衷心よりご挨拶いたします。親身な葉書をありがたく拝読。目下ご主人様宛に長い戦争書簡を作成中、しかしながら様々な軍事上の妨害あり。

敬具 ローベルト・ムージル拝 (BI, 106)

マルタの文章にも驚かされる。夏のバカンス先からの、型どおりの挨拶状以外の何ものでもない。およそ戦地から、最前線から送られてきたものとは思えない。どういうことであろうか。

1914年7月28日オーストリアはセルビアに宣戦布告し、これにより戦争が開始されたのであるが、この戦争はその後一週間あまりのうちに、ロシア、ドイツはもとより、フランス、イギリスをも巻き込む大戦争へと拡大した。

ムージルが赴いたオーストリア領・南チロルは、イタリアが「未回収のイタリア」を唱

え、みずからの領有権を主張していた土地であった。ヘートヴィッヒ宛の絵葉書が差し出されたゴマゴイは、南チロルの西部、その名の語源である「二つの川」 *geminæ aquae* が示すように、トラフォイ川とズルデン川が合流する地点にあり、この町からスイス、イタリアへの国境へはほんの目と鼻の距離であった。先に述べたように、オーストリア・ドイツ・イタリアによる三国同盟が有効であった時期、ムージルの任地オルトラー・アルプスの北側地域でも、本格的戦争は戦われていなかった。この地域の真ん中に位置するゴマゴイの町も、やがてオーストリアとイタリアとの戦争が本格的に戦われるようになった後には、軍事作戦上の理由からオーストリア軍により完全に破壊されることになるのであるが、未だ戦争状態にないこの当時、とりわけマルタにとって、オルトラー山 (3,902メートル)、ケーニヒス・シュピッツェ山 (3,857メートル) を望み、総じて風光明媚な南チロルの中でも特に美しさが際立つ¹¹⁾この地での滞在は、時期をずらせた夏の休暇のように感じられても故のないことではなかったのである。とはいえ、傍らにいたムージルの軍服姿こそが、マルタの気分を高揚させる一番の理由であったことはもちろんのことである。絵葉書の短い文面は、そうしたマルタの気分を映している。

ムージルは11月に少尉から中尉へと昇進し、季節は厳しい冬を迎え、そして年を越した。

この時期ムージルの身辺がすべて無事順調であったわけではない。明けて1915年1月、上官との軋轢が原因でムージルは中隊指揮官の任を解かれることになった。ムージルの父アルフレートにとっては、文字通りに命の縮まるような大事件であった¹²⁾のだが、ムージルと一緒にいるマルタにとってはどうであったのだろうか。ムージルの新しい任地から、マルタはやはりヘートヴィッヒ・フィッシャー夫人に宛てて手紙を書いている。

レーヴィコ (ヴァルスガーナ)

ヴィラ・ダッラ・トッレ 1915年4月3日

親愛なる奥様

あなた様からのお便り、トリエント経由で、今ようやくこちらに届きました。

ご滞在の件ですが、心配ご無用、きっと快適にお過ごしいただけるものと存じます。と申しますのも、状況は、以前よりずっと落ち着いてきているからです。主人によりますと、確実な兆候からこう考えることができるということですが、そうは申せ、その詳細については知る由もございません。蚊帳の外にいる者としても一言申しますと、当地、すなわち国境に隣接する地域には、おびただしい負傷者が搬送されて参っているのですが、このことなどについても、私のような者には何かほっとするものに感じられるのです。つまり、いざというような場合には、負傷した人々を一番に考えて差し上げることができるからです。

コルチナ越えて来襲してくることはありえません。その地域の国境はしかと固められております上に、一帯の地勢は、大部隊を動かすには不向きだからです。不意打ちを食らうことは考えられません。それでも万が一、状況が緊迫するようでしたら、何と申しましても私どもは国境地帯に滞在しておりますので、情報を確実かつ迅速に入手し、電報にてただちに奥様にお知らせ申し上げる所存です。

私どもがこのレーヴィコに参りまして、もう一ヶ月以上になります。それ以前は、十

日間ほどベルジネに居りました。ヴァルスガーナ谷一帯は今や春たけなわ、本当にすてきです。ことにカルドナツツォ湖はえもいわれぬ程です。以前に、この地にいらしたのでしたら別ですが、そうでなければ、ただし情勢が今のまま続くと仮定して、是非とも散策などなさってみて下さい。サン・クリストフォロはトリエントからの足の便もよく、特にお薦めの場所です。私どもが滞在している町も、景色などのことではそれなりに素晴らしい所なのですが、湯治目的の方々のお姿を見かけることはございません。ホテルのほとんども軽傷者用の病院として使われています。将校の妻たる者たちが滞在するばかりです。もっともアンニーナは学校が休みに入りましましたので、今ここに参っております。皆様から、国境の子供などという名前で呼ばれたりしております。私どもは、将校に割り当てになった大きな屋敷に住んでおり、楽しく暮らしております——夫が、今しも最前線に出て行くのでは、ということについてはなるべく考えないようにしております。

奥様の目下のお苦しみがすっかり解消いたしますことを、そして奥様とご主人様の神経が平癒されますことを、お祈り申し上げます。くれぐれも無用のご心配などはなさいませんように。領土割譲の件については当地でも話題になりますが、はっきりしたことは申しかねます。美しいトリエントの町が失われるなどとは、想像したくもないことです。

奥様、ご主人様、そして皆様に対しまして、主人ともども、心よりのご挨拶をお送りし、あわせて復活祭のお祝いを申し上げます。

マルタ・ムージル

P.S. ほんとに残念ですが、私どもはノイエ・ルントシャウをもう長いこと目にしておりません。読んでみたい気持ちは山々です。(BI, 108f.)

手紙を書く人がいれば、手紙を受け取る人がいる。マルタの手紙は晴れやかである。自分の側の弱音、苦勞、不幸のようなことは一言も記していない。他方、手紙を受け取った社長夫人は、この手紙をどう読んだのであろうか。

ヘートヴィッヒ・フィッシャーがマルタに宛てた手紙には、どうやら、ムージル夫婦が現在逗留している南チロル南部地域へ、すなわち今は戦地になっているものの、風光明媚な湯治場が数多く点在することで知られるトレント周辺に、すぐにでも出かけて行きたい旨の相談が書かれていたと推測しうる。

マルタは得意満面の調子で返事を書いている。世界の注目を浴びている桧舞台に自分も立ち会っていること、そこではどのような文学も表現し得ない壮大なドラマが、日々に展開されていること、自分の夫は将校として特権的身分に浴していること、自分はその妻として、同じく特別の厚遇に浴していることの報告が、この手紙の主旨である。

ヘートヴィッヒはベルリンにいた。出版社主の夫ザムエル・フォン・フィッシャーは1859年生まれ、このとき55歳であり、戦場に出て行くことは考えられなかった。都会にいる者と戦場にいる者、都会に残った老人と戦場にいる若き将校、都会と大自然、病と健康、観客席と舞台。そして、である。フィッシャー社の看板雑誌「ディー・ノイエ・ルントシャウ」は、もはや戦地では目にすることはできないと伝えるマルタ。ヘートヴィッヒが、マルタからの返事にどのような気持ちを抱いたかは、伝えられていない。が、一言付

け加えるに、戦後、ムージルとフィッシャー出版との縁が切れてしまったことは単純に事実である¹³⁾。

第一次大戦は、ある意味、不思議な戦争である。戦いに勝つことが最終の、そして最大の目的であることはすべての戦争に共通であろうが、第一次大戦は、戦いの大義と戦い振り、すなわちスタイルが極端に意識され、それは都市の生活ぶりにも端的に現れており、マスコミのスタイルも同じであった。全ての場面で、何かしら品位が重んじられた戦争であった。その理由は、この戦争が「世界」戦争、すなわち多くの国々の複雑な関係の中で戦われた戦争ということに起因していると考えられる。

ベルリンでは戦争中を通じて、演劇・オペラはずっと上演され、映画館にも人が押し寄せていた。しかし、映画は未だ無声映画の時代であり、ラジオ放送の開始も、戦後になってのことであるから、マスメディアということでは、新聞を中心とする活字出版物が圧倒的な力を有していた。1914年当時47歳、ケルはそれでも従軍を志願したようである¹⁴⁾。が年齢からしても、またその経歴からしても戦争に行くことはありえなかったケルは、こうした状況下、首都ベルリンを本拠に、盛んな文筆家活動を行なった。そしてこの詩が書かれた。

引用したヘートヴィヒ・フィッシャー夫人宛のマルタの手紙の裏に透けて見えるあの残された者の悲哀・無念、参加している者への無条件の憧れ、こうしたものがなぜケルの詩にも感じ取れないことがあろう。ケルの詩については、マルタが1915年、ベルリンからムージルに宛てた手紙に、ケルはくだらない詩を書いている、と書き送ったことがある¹⁵⁾。マルタのそうした考えとは別に、ムージルはこの詩をみずからの新聞に採った。ムージルは、書斎という塹壕にいて戦いを口にするケルの姿勢・態度を容認し、理解できた。なぜなら、戦地ボーツェンに居るとはいえ、新聞の編集の任にあって、記事に目を通し、みずからも原稿書きに勤しむみずからの姿は、これを解剖学的に凝視すれば、ベルリンにいるケルと何ら違いがないことを、ムージルであればこそ自覚したに違いない。

ゾルダーテン・ツァイトゥング編集者としてのムージルとケルとの関係について、二点述べねばならない。一つは、ケルの2篇の詩がゾルダーテン・ツァイトゥングに掲載されるにあたり、ムージルがどのようにに関わりあったのかということである。今ひとつは、クラウドによるケル＝ゴットリーブ批判の問題とこれに対する、ムージルの立場・考えに関する問題である。

「オード・第六景」は1916年6月15日付の新聞に載った。ムージルは7月8日からゾルダーテン・ツァイトゥング紙の編集に正式に加わっている。ディンクラゲによると、それ以前6月18/19日付の関連書類にもムージルの署名が確認されている。何らかの形でムージルが、「オード・第六景」がゾルダーテン・ツァイトゥングに載ることを承知していたと考えても無理がないように思われる。が、この点についてはこれ以上は不明である。

「戦いが行く……」については、この詩の掲載当時、ムージルはこの新聞の責任編集者であった。掲載について承知していたことはもちろんであるが、掲載については直接ムー

ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル「ゾルダーテン・ツァイトゥング」紙上の二人

ジルの意向によるものと考えられる。この時ゾルダーテン・ツァイトゥングは、この詩の作者について特に解説を載せている。

「戦いが行く……」の詩は、詩集『聖なる防衛』（現代ドイツの戦争抒情詩、カール・ヤークブチック編、ヘルダーシェ書房）から採った。この本については先の37号で紹介済みである。——アルフレート・ケルはドイツの作家である。オーストリアの読者の間では、さほどでないはないものの、ドイツ国内でのその知名度は非常なものである。『新しいドラマ』のタイトルで編集された彼の批評集は現代演劇に関する最良の書である（但し、演劇通にのみ）¹⁶⁾。

ムージルをトップとするこの時のゾルダーテン・ツァイトゥング編集スタッフについては明らかになっている。その中で、唯一ムージルがケルの人となりとその業績について、こうした具体的な紹介をする知識・正当な資格を有していた¹⁷⁾。

カール・クラウスはゾルダーテン・ツァイトゥングの熱心な読者であった¹⁸⁾。戦後のクラウスによるケルへの攻撃は、長い期間暖められていたものかもしれない。クラウスのゴットリーブ攻撃、すなわちケル非難の主旨は、戦時中にはゴットリーブの名で汚い愛国詩を書いていたのに、戦後になってそ知らぬ振りで平和主義者を装っている点、それから戦争時に書いた詩に表現されたケルのぶざまな滑稽振りを指摘した点の二つである。偽名ゴットリーブについて、ケルはクラウスに「ドイツ全土で最も卑劣な男」とののしられながらも、この攻撃への反論を最終的には放棄し、それによりケルは結果的にクラウスの指摘を認めた——クラウスの伝記を書いたシックはそう判断している¹⁹⁾。ムージルであるが、日記の中で「クラウスの戦争への敵意は、戦争への熱狂と同じく、道徳的には不毛である」（TI, 634）と短く記している。ムージル自らが、その滑稽ぶりが表現された詩をゾルダーテン・ツァイトゥングに採ったのであるから、この場合のケルへの攻撃は、編集長ムージルに関わりが無くもない。クラウスは、ムージルについて公にものを言ったことはない。しかし、ムージルがケルの息のかかった人間であり、ケルの信奉者であるとの理解は持ち続けていたようだ。

IV ムージルのエッセイ

インスブルックの北、ブレンナー峠を越えヴェローナ、あるいはヴェニスに向かう途中の最も大きな町、それがボーツェンである。旧オーストリア＝ハンガリー帝国解体後の1919年以降の呼び名はボルツァーノと変わった。が、ケルは咬いている、「この場所はボルツァーノとは言わない。この場所の名はボーツェン——永遠に」²⁰⁾。ゾルダーテン・ツァイトゥングは第一次大戦中にまずはインスブルックで、その後ボーツェンで発行された戦時新聞である。その目的とするところは、国家と軍隊の主要問題に関する国民教育、民族統一主義の克服、帝国維持論の強調であった。初期には週3回、やがては週一回、日曜日に発行された。

ゾルダーテン・ツァイトゥング、1916年8月18日付の名称変更前はチロル・ゾルダー

テン・ツァイトウング。1915年6月2日、第1号発行。チロル方面オーストリア国防軍司令部がインスブルックで発行した。この新聞は、一般の人々に読まれることも想定して発行された。ムージルは1916年7月8日よりこの新聞の編集に加わり、同年10月8日付の号より発行責任者となった。編集スタッフの総入れ換えがなされたこの機に、新聞の発行地もボーツェンに移された。そして翌1917年4月15日付、第45号でこの新聞が発行を中止するまで、ムージルはその職にあった。ムージルがこの新聞に書いたとされる文章は、すべて匿名である。この点についてはすでに細かな議論が重ねられているので、本論で触れることはしない²¹⁾。ケルの詩「戦いが行く……」の次の号に掲載された「高貴にして健やかに生まれし閣下！」²²⁾は、識者揃ってムージルのものと認める論文である。以下、この論文の全文を詳しく読むことにしよう。

高貴にして健やかに生まれし閣下！

I

人間の一生における最も暗い点のひとつは誕生である。これについて私たちが承知していることといえば、太古の世界の塊^{かたまり}にくるまれ甲高い声を発しているもの、青色と赤色のもの、ソーセージの皮のような光沢を持ったものが、あたりはばかりことなく発せられる苦痛の叫び声と共に、押し出される、ということのみであり、——どのような観点に立とうが、上品な調子に違反すること、この上もない事象なのだが——そして、17年ないし20年が経過した後に、君はそれが高貴なる誕生であったとか、または高貴にして健やかなる誕生であったとか、あるいは健やかなる誕生であったことを聞かされるわけである。それというのも、かのソーセージの皮はその間に、人間として必要な愚かさや下品さのあれこれを、みずからの中に詰め込み始めているわけであるが、この頃になると、その皮の輝きの程度に応じて、高貴にお生まれし閣下、高貴にして健やかにお生まれし閣下、あるいは単に、健やかにお生まれし方、との肩書きで呼びかけられる機会が生じて来るからである。そして、こうした呼びかけの相違が、なぜ、そしてどのような秘密の決まりに従って発生するのかについて、詳細を熟知している者はいないのである。

身分の差、あるいは身体的特徴、生れ落ちる偶然、なぜ自分は自分であって、他人ではないのか？ こうした疑問は成長期にさしかかる全ての人間に訪れるものであろう。ムージルは今、このエッセイで、オーストリアの階級制社会の現状を直視し、人間存在の根源に触れる疑問を口にしながら、この問題について具体的な分析を開始する。

高貴にして健やかにお生まれし閣下、と称せられるのは、男爵をもって始まりとなす、と主張する人々がおり、そしてまた、軍の少佐をもって始まる、と言う人々もいる。もっとも、この二つの意見の違いは、一般的に考えられているほどには大きくない。というのも、少佐に昇進するには、それ相応に長生きしなければならず、そのためには同じく、良き父母から生まれてくる必要があるからである。

長生きした子供を産んだ両親は「良き父母」であり、そのことだけをもってするならば、

貴族も平民も身分的に変わるところはない、軍隊で手柄を立て、勲功を得た暁には、生まれ付いての身分差は場合によって解消し得るものであることを、ムージルは言う。この文章に漂うかすかなユーモアの調子は、続いての、たたみ掛けるようなムージルの鋭い分析の中で、より鮮明になる。呼びかけの尊称に付随する曖昧さ、いかがわしさについて、ムージルは続ける。

しかしながらこれに加え、何かをねだる場合には、高貴にして健やかにお生まれし閣下、何かをねだられた場合には、健やかにお生まれし方、と書く人々がいる。気分が良い時には、高貴にして健やかにお生まれし閣下、気分を損ねている時には、健やかにお生まれし方、と書く人々。誰一人の気分も害したくはないとの考えから、通例の場合は、例外なく高貴にして健やかにお生まれし閣下、と書き、健やかにお生まれし方、は、どうしても好きになれない相手に「お前は健康に生まれついている。が、それ以外の何ものでもない」と言っただけに限り人々。健やかにお生まれし方、を使うことを専らにしている人々。その他、いろいろな人々がいる。そして最後となるが、冷静かつ断固として片方に、健やかさ、もう片方に、高貴なる健やかさ、を分かち与える人々がいる。この人たちは左を、あるいは右を見たりすることなどなく、また、やむなく傷つけざるをえない人物の方も、あるいは敬わざるをえない人物の方も見やることなく、今に至るも自分たちが所有している秘密の決まりに従っているのである。奇妙なことに、この決まりに通じた専門員のメンバーに、お役所が加わっていないのである。同一の人間が、——彼が軍事の、法務の、財務の機関から、商工会議所から、市当局から、州から受け取る封書を較べてみる時——役所が異なるごとに、異なった生まれとされているようである。要するに、出発点に戻るが、人間の一生における最も暗い点のひとつは誕生である、ということである。

身分差、それを表示する尊称・称号。ムージルは、みずからの人生の一こま一こまを大切にしたい人間である。少しでも傷つけずに、箱に収めていたというのではない。みずからの体験、見聞、それらを常に点検し、記録し、分類し、これらを自在に組み合わせて、人間存在の在りようを描きとめようとした。ムージルは1908年当時、大学研究者のポストの件で、「高貴にして健やかにお生まれし閣下！」すなわちグラーツ大学教授宛に書をしたためたことがあった。その手紙は、形式が勝ち過ぎているようで、どこか上滑りの感じがする。自分ならぬ自分が書いていると、ムージルは感じていたであろう。今1916年、ムージルの身边において変わらずに使われているこの種の呼びかけの尊称を個々に観察するならば、それらは様々な矛盾に満ちており、常日頃、国家の名において我々を管理・監督し、これら尊称・称号の用い方に最も通じていると思われるお役所において、その混乱ぶりが最も顕著である、とムージルは読者を笑わせる。お役所を笑った第一章の意図は、問題の所在を明確化することであった。続く第二章では、歴史的視点に立って問題の分析がなされる。

II

我々が産み出され、中へ入って行く人生、いわゆる現代のことであるが、これについて

は、時代にマッチしたプランに合わせて、新時代のあらゆる快適さを設計企画の段階のうちにあらかじめ考慮に入れて、かつ今日という日に合わせて我々を迎え入れるために、昨日ちょうど完成されたばかりの家であるなどと決して思ってはならない。この現代は、古くなったことが理由で修繕を施された箱、と考えたほうが良い。その基礎部分は年相応に古いものである一方、壁については、必要不可欠と感じたそれぞれの年代の人たちにより、模様替えや増築が施されて、その形が変わり、挙句の結果として現在の姿を取るに至ったのである。

現在の状況は、決してあらかじめのプランにしたがって生み出された状況ではない、現代、すなわちこの新時代には、人の意志と無関係に、以前の時代、古い時代が混在、併在していると述べるムージルは、その具体例を列挙し、詳しく説明する。

我々は「すべての国民の平等」を有している。その一方ではまた、「或る者を貴族に列する」という表現も持っており、もしも貴族が罪を犯したかどで有罪の判決を下された時には、貴族に対し市民の身分を授与するという習慣も持っている。我々は、名誉を賭けた騎士としての決闘の習慣を持っている一方、名誉毀損裁判に訴え出ることもする。言論の自由があり、それでいながら演劇の検閲がある。後者については、パリ風の笑劇の猥褻性には目をつむってもらえることがある一方で、真剣な芸術の確信に発する表現に対しては、無理難題が持ち出されるのが通例である。我々は法律により、信仰の自由を容認している。が、実際上はむしろ不信仰の自由を黙認しているのである。良きキリスト教徒や良きユダヤ教徒でない人がいるとして、その人が信仰上どれほど不決断であっても、我々はその者を許容する。しかしながら、その人が、自分は不決断な信者であることを中止したいと言う瞬間、我々はその者に大いなる無理難題を持ち出すのである。結果として、その人が良い信仰者に成ることなどは金輪際ありえない、ということになるわけである。その他多くの事柄についても同じで、我々が為すことはものごとの一部分だけであり、その他の部分はとうに永遠の中に没してしまっているのである。同じように、勲章によって騎士団共同体への所属資格も同時に与えられるわけであるが、その共同体はどこにも存在していない。その昔、公の場所での喫煙は法的処罰の対象であった、ということを知って大変いぶかしく怪訝に感じる我々が、ご婦人方の喫煙については断固反対を唱える。あれこれの服装規定があった時代について、そんな規定は今の時代に何ら重要性は無いと感じている人々が、しかしながら、スポーツをする際に女性がズボンを着用すると、道徳上まことに許しがたいと感じる。こうした風に矛盾を数え上げていけば際限が無い。公の生活の現象すべてにおいて、その時代の意志を刻み付ける、といった激烈さを持った時代は、歴史上存在しない。全ての時代は、先行して存在した時代の何がしかを超克したのであるが、残余の部分についてはそのままに残ってきており、さらにその後続く時代ということになると、そうした残余の部分を解消しようという努力をしても、なおのこと甲斐が無くなる。一体どこにそうしたものが残っているかという、形式と慣用語、とりわけ儀礼と習わしにおいてである。我々が使用している書簡の呼びかけも、そうした過去の深い淵に由来しており、これら呼びかけの使い方は、いわば地層の年代を教えてくれる示準化石というわけである。

言動の不一致、建前と本音の矛盾、新時代を覆うスローガンの欺瞞を暴露するムージルに、躊躇うところはない。「パリ風の笑劇の猥褻性には目をつむってもらえることがある一方で、真剣な芸術の確信に発する表現に対しては、無理難題が持ち出されるのが通例である」とは、遡ること五年前、ベルリン警察署長ヤーゴ相手にセンセーショナルな喧嘩をやったのけたケルの姿がいささか美化されて、思い起こされているのかもしれない。

この文に続けて、信仰の自由の問題が取り上げられている。ムージルがこうした問題に言及する時、何を念頭に置いていたのか。空の下、全ての人間が眉をひそめる不信人者が、突如熱烈な信仰心を口にする、表現する。これまで彼の不信仰、不道德ぶりについては何らの苦言も口にできなかったにもかかわらず、その不信人者が、態度を180度改め、今や聖人の研究に打ち込み、これを霊験劇として作品化し、世間に知らしめようとした瞬間、パリ大司教は、ローマ法王は激怒したのであった。ムージルは今、このとき、1916年の今のダヌンツィオについて、そのショーヴィニズムについては、何ら触れない。関心を示していない。それでいて彼に生じた事件、その問題点、そのドラマ性を今ここに採っているのである。これがムージルである。「地層の年代……示準化石……」——ケルはムージルについて終生、工業学校の生徒のイメージを持続けた。ムージルは往々にして幻想の作家と称せられる。別のものを凝視しているのである。続きを読もう。

貴族でない者に決して、高貴にして健やかに生まれし閣下、とは書かないという人は、厳しい区別がなされた「等族」——貴族法と市民法により——が存在していた時代に生きているのである。この畏敬を役所の上司にも広げたいという欲求に抗しきれない人は、全部が臣民であり、へりくだっていた時代、反証が出されなければ胡散臭い人物とされたあの時代に対して、その身を屈しているわけである。当時、自分自身の身分を、叙爵書または役人証書により明らかにできない者は、「輩」と、あるいは「何某」または「さる人物」と呼ばれ、この者たちに対し、「お上」の警察は鋭く光る目を二倍の大きさに見開いたのであった。

こうした慣わしも徐々には死滅し、後の時代のものにとって代わられることになるが、それもまたすぐに古い時代のものとなってしまう。そこには、いつも仲良く付いて来る無邪気な軽率さというものが存在している。というのもそうした慣行は、深い思慮に触れられる程度が少ないほど、その分、より良好に保持されるからである。習慣が途絶えたという時でも、いささかの不健康さが放たれている。

「深い思慮」——この個所でこの言葉に出会った瞬間、読者である我々はあらためて、ムージルはこの論説を書いている場所、すなわちゾルダーテン・ツァイトウングという新聞のことを、どのように意識していたのか、問い直したい気持ちに駆られる。「いささかの不健康」——よくもまあ、このように真正面から、このように生真面目に、読者に向けて、現に存在する社会に向けて、その権力機構に向けて、その権力構造を担う「高貴にして健やかに生まれし閣下」に向けて、誰も口にしないこのタブーを、意見を展開するものだとあきれてしまう。いや、このくだりでムージルの意図を、ムージルの主張に感じ入るのは、いささかムージルに肩入れが過ぎるのかもしれない。主張は、以下第三章で諧謔の調子をさらに強めて、さらに展開される。

III

そうした慣わしには——名誉欲の反対語は何であろうか——何かしら、名誉無関心の気味がある。というのも結局のところ、そうした習慣の内容を成すものは、自分たちは二等級ないし三等級の世界市民に過ぎないと、大多数の人間による、そもそもは慇懃さに由来する確約の言だからである。そして犬だけが、自分に当てられる鞭をみずから口にくわえて運んでいくのである。そうしたものは、風味を台無しにする何ものかを持っている。すなわち、かつて慣わしであった「高き官庁に、変わることなき深い恭順を捧げる誰それ」の言い方が^{すた}廃れていった時、そこには官庁への尊敬を減じようとの意図が働いたわけではなく、曲芸のように背中を丸めて縮こまる市民の光景が、何かしら腐って臭気を放つ何ものかを有していたからである。そうした慣わしにはオリент風の気味がある。というのも、人々は「君は、偉大な人物の息子であり、孫である」と言って誉めるのであるが、この誉め言葉の正反対はアラビア人のののしりの言葉になるからである。アラビア人は腹を立てると「君は、犬の息子であり、孫である」と言う。

古い時代のなごり、ひきずっている旧弊というものがいかにこっけいで愚かしいか。そして、現オーストリア＝ハンガリー帝国は抱えているこうした古い時代のなごり、旧弊故に弱体化し、無力化している。ムージルは若い同僚に向けて、そう語りかけるのである。

そうした慣わしは、間違った停滞へと向かわせる何かを持っている。というのも、君は裸で生まれ、ほんの間に合わせに過ぎないわずかばかりの立派な行為で——人生においてこれらの行為を為すための力と機会を君は見出すであろうが——その身をくるみ、判定の眼差しの前にまかり出ることであろう。君が到達する一つ一つの階段で、もしも君が「これから先は?!」「どのような新たな行いに向けて?!」と言う代わりに、虚栄心から「ああ、今の段階ですら私は何と素晴らしく生まれていることか!」と独り言を発するならば、君は鏡の前で時間を無駄に費やしたのであり、結局のところ、邪悪な男に対し、立派な人間として発砲する代わりに、射的場の勲章を目当てに的を射たことになるのである。

生まれについて、決して鼻にかけてはいけない、虚栄心を抱いてはいけない、ムージルはそう諫めている。語りかけは、より多くの人々の方を向いて、そして、より真剣さを増して続く。

——古いなごりは内的不自然さを持っている。というのも、我々の道徳は内なる善意以外の何ものも語らないのであり、人は人間をその内的価値によって評価すべきである、と教える。そして、そうした古い習慣は高貴に生まれし人間と、健やかに生まれし人間とを分かつことにより、この教えを覆い隠してしまうのである。その場合に、こうした呼びかけによって、我々は何をもって善と名付け、また悪と名付けるのか、例えばそれは、金持ちに生まれし閣下、とか、貧乏に生まれしお方、などと書く明快さには程遠く、全くもって判然としないのである。——それらは結局のところ、不合理を有しているのである。というのも、それらは、高貴に、高貴にして健やかに、貧乏に、金持ち

に、ゆがんだ体に、曲がった体に、その他あれこれの状況に生まれついているにせよ、ただ一つ、決して健やかには生まれついていないこの世界の中であって、世界のこの営みの全てを目の当たりにし、それでいながらこれに手を貸さざるを得ないほんのわずかな人々に対して、彼ら自身を、高貴にして健やかに生まれし閣下ではなく、低俗にして弱々しく生まれし者、と名乗らしめないものである。この点で、Herr「ご主人」と言う以外何も書かない手紙の上書きがドイツで実行されているが、私はこれを賞賛する。こう言ったからといって何も無作法者が、とはつまり、大衆公共鉄道の時代の、大衆商取引の、大衆普通選挙の、大衆新聞の、その他、その他、大衆一辺倒の時代に大手を振って歩く輩が、すなわち我々の時代以前には知られていなかったこのような群衆人間が、「ご主人」である、と言いたいわけではない。そうではなく、そうした風に考えるならば、希望が——これまでと変わらぬ態度でせつせと本分に精を出している男に向かって、毎日のように「君は、その力を正しい生き方に結びつける人物に、すなわち『ご主人』になるのだぞ」と声がかかる場合に——最終的に、この男はそうした人物になるという希望が、残るからである！

ムージルは、幾ばくかの不合理は避けえないものの、現在のオーストリアの体制、社会が明らかにドイツに比べ旧く、時代遅れのものになっていることを説いている。そしてこの点を、特に若い世代、次の時代を担うであろう若者に向けて語りかけている。一息継いだムージルは、こう締めくくる。

そういうわけで、「お生まれ」の付いている呼びかけについてはこれを廃し、「お生まれ」が生まれぬよう避妊の手立てが施された呼びかけの言葉を採用する時が来ているように思われる。

「お生まれ」が生まれぬよう避妊の手立てが施された呼びかけの言葉——何と、人を喰った文章。巧みなのか、上手いのか、そうでないのか何とも評しようのない、言うならば理科の人、工業学校生徒だったムージルの駄じゃれ。名門貴族の家に生まれた若者に向けた呼びかけの形をとった、ここでの訴えの内容は深刻かつ微妙なものであるにも関わらず、全文をユーモアが、機知が、笑いが、そして皮肉が覆っている。この内容にして、この文章。後年の『特性のない男』の兆しが、このエッセイに指摘されることに、何らの不都合も無いと思われる²³⁾。それにしても驚かざるを得ない。「戦場において」発行されていた新聞に、こうした記事が掲載されていたのである。誰が読んだのであろうか。土と汗にまみれ、考えることはと言えば、美味しい食べ物、ビール、ワイン、そして何よりも美しい女性の官能的な姿、休息、安らぎ、恐怖からの解放——こうした気持ちでいる兵士が、果たしてその一方で、難解で、もってまわった文章ではあると感じながらも、それでも辛抱強く、よくよくの注意を傾けて読んだのだろうか。この記事の中にちりばめられた、いたずら小僧による仕掛けやら、お偉方に向けられた遠慮無い物言いの姿やらに気付いて、にやりと笑みを浮かべながら、思わず膝を打つとか、といったことがあったであろうか。オーストリアの真の病弊の指摘、それに伴う体制批判の表明、そこに付随する愛国の思い、そしてイロニー、これらに兵士達は胸を打たれたであろうか。

V 結び ムージルとケル

第一次大戦当時、ムージルはムージルで愛国者であった。そして、ケルはケルで愛国者であった。戦争参加への二人のかたち、それはまるきり逆であり、何らの接点もない。従軍したムージル、ベルリンに居残って都会生活を続けたケル。しかしながら、二人はゾルダーテン・ツァイトゥング紙で出会っていた。

ムージルの論文を一読すると、前線にいたムージルにとって、果たして戦争はどこにあるのか、と問いたくなる。ゾルダーテン・ツァイトゥング紙にあっても、読み手におもねる、迎合する——こうした態度、考えはムージルには無縁であった。例の「パーン」に掲載したムージルの第一エッセイが思い出される。一体ムージルは、ケルを、「パーン」を応援しているのか、と。しかしながらムージルは、事態の核心、問題の真の論点を見つめ、これを表現した。今ムージルは戦争を目の当たりにし、ここに潜む問題を見据え、見通していた。真に解決すべき病巣は何か。オーストリアについて、人間について、歴史の仕組みについてムージルは考察をめぐらせた。そして事態の根源について省察を続けた。ムージルの身に起こった軍人としての昇進、父親への、従ってムージルにも及ぶ爵位の授与、その他戦争のあれこれがムージルの感情を動かすことはなかった。『熱狂家たち』のトーマスは言う「最初、この接吻ははるか前方にあって僕を誘っていた。今では同じく僕のはるか後方にあって、燃え盛っている。僕たちはこの接吻の中を通り抜けてくることができなかった。ほんのわずかさえも」(P, 404)。通常起きるような感情を持たずに、省察し、凝視する人間トーマスには、ムージル自身が重ねられている。こうした省察と凝視、そこから生まれたエッセイは、やはり「透徹」している。後年リルケを評した言葉は、すでにこの時のムージルふさわしい。ムージルは未来を見据える指導者の観がある。

ケル、感情の人、大衆の気分に敏感な人、期待されているものが本能的に分かる人。社会全体を支配する戦争意識を代弁することができる人。大衆と共にある人間。ケルはこの戦争の時代にも人の目を、多数の人の目を意識して、そうした人々の意を汲んで文章を書いた。怒り、嘲笑、からかい、哀しみ、共感——こうした人々の気持ちをケルはそのまま文章に綴った。そして、論争家として、批評家としての戦略についても同じだった。ケルはジャーナリストとして常に戦略家であった。ゾルダーテン・ツァイトゥング紙上での偽名と本名の使い分けにも、そうした戦略を窺うことができる。彼の手法、彼の美学、彼の生き方の反映であった。ターク紙のゴットリーブの詩は辛口の諧謔詩が専らである。平行して、ケルの実名で劇評を書き、ヤーゴ相手に大見得を切っていた。表にはケルがいて、裏にはゴットリーブがいる。裏と表で大きな陣営を構え、やがてはこの二つの名が、大勢の人々の前で一つになることをケルは考えていたであろう。しかし、ドイツ・オーストリアは戦いに敗れ、その名には相応の泥が浴びせられた。

ゾルダーテン・ツァイトゥング新聞紙上において、激動の時にあって二人は徹底して自分自身を貫き、自己を表現した。ムージルにとって、平時にも増して鮮明なケルの姿がそこにあり、ケルにとっては相変わらずのムージルが、戦争に正対しているにも関わらず、そこには敵味方の姿が無く、勝利への決意も、敗戦を免れようとの意志すらも見いだせない文章を書くムージルが、そこにいた。

注

ムージルの手紙は以下のものを使用した。

Musil, Robert: *Briefe*. Hrsg. v. A. Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1981 (本文中ならびに以下の注で BI と略記し、その後にページ数を記す)

Musil, Robert: *Tagebücher*. Hrsg. v. A. Frisé. Reinbek bei Hamburg 1983 (本文中に TI と略記し、その後にページ数を記す)

Musil, Robert: *Prosa und Stücke, Kleine Prosa, Aphorismen, Autobiographisches, Essays und Reden, Kritik*. Hrsg. v. A. Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978 (本文中に P. と略記し、その後にページ数を記す)

- 1) Tiroler Soldaten-Zeitung, 15. Juni 1916, Nr. 176 bis 178, S. 10f.
- 2) 岩波西洋人名辞典増補版, 岩波書店, 1956年, 771頁「セバスティアヌス」の項参照
- 3) 『聖セバスチアンの殉教』ガブリエレ・ダヌンツィオ著, 三島由紀夫・池田弘太郎訳, 図書刊行会, 335頁以下の作品解説に拠る。
- 4) Neue Freie Presse, 24. Mai 1911, Nr. 16793, S. 13
- 5) Woolf, Vicki: *Dancing in the Vortex. The Story of Ida Rubinstein*. Harwood Academic Publishers 2000, p. 38
- 6) 『聖セバスチアンの殉教』347頁
- 7) 公の見解として言われたわけではない。しかしながら例えば, ベルリナー・ターゲブラットの批評家パウル・ベックの批評の書き出しは, こうした事実を踏まえたものと思われる「法王とパリ大司教は激怒したが, 何の甲斐もなかった。敬虔な信者の誰一人も, 聖セバスチアンの苦しみが音楽として変容することに, 腹を立てる者はいないであろう。また, 職業上の理由から信仰をないがしろにしている批評家どもの魂について, ローマ法王が気を病む必要はないのである。我々がシャトレ座において, 信仰心を持って目の当たりすることのできた五幕の説教は, パンフレットで告げられていた霊験劇が, あらかじめに我々に期待させていたものを遥かに凌いだ。その説教はただ単に異教徒の改宗について教えるに留まるものではなく, 今在る二つの事例についても, このことを示すものである。現世享受者ならびにユダヤ人がいかにして神に帰依するか, とはすなわち, 思い上がった中世人ダヌンツィオが激しい情熱に駆られて『私の過誤』とうめき, 他方, イスラエル女ルビンシテインはその白い四肢を, 栄光の光に包まれたキリスト教殉教者の体へと変貌させるのである。……」Vgl., Berliner Tageblatt, 27. Mai 1911, Nr. 267, S. 1
- 8) Kerr, Alfred: *Russisches Ballett*. In: *Die Welt im Drama V*. Berlin (S. Fischer) 1917, S. 491
- 9) „D’Annunzios Anruf“, Der Tag, Nr. 245, 15. Mai 1915, S. 3
- 10) Tiroler Soldaten-Zeitung, Nr. 38 vom 25. Februar 1917, S. 10
- 11) Baedeker, Karl: *Tirol. Vorarlberg und Teile von Salzburg und Kärnten. Handbuch für Reisende*. 38. Aufl. Leipzig (Karl Baedeker) 1923, S. 236f.
- 12) Vgl. Corino, Karl: *Robert Musil*. Reinbek bei Hamburg 2003, S. 512f.
- 13) 1924年11月6日付, ムージルからリルケに宛てた手紙:「帝国崩壊後, フィッシャーは私を見捨てました」(BI, 361)
- 14) Corino, Karl: *Robert Musil*, S. 491
- 15) „Ich lese jetzt meist Kerr’s Gedichte im Tag, sie wirken ganz läppisch, schlecht.“ 1915年8月15日付, マルタからムージルに宛てた手紙(未発表)。この手紙については, カール・コリーノから資料の提供を得た。手紙のオリジナルはウィーン国立図書館, マニユスクリプト課所蔵。

- 16) Tiroler Soldaten-Zeitung, Nr. 38 vom 25. Februar 1917, S. 13
- 17) Corino, Karl: *Robert Musil*, S. 559
- 18) Ebd. S. 562
- 19) Schick, Paul: *Karl Kraus*. Reinbek Hamburg (Rowohlt Taschenbuch Verl.) 1965, S. 117ff.
- 20) Kerr, Alfred: *Es sei wie es wolle, Es war doch so schön!* Berlin 1927, S. 23
- 21) Roth, Marie-Louise: *Ethik und Ästhetik*. München 1972, S. 528; Arntzen, Helmut: *Musil-Kommentar sämtlicher zu Lebzeiten erschienener Schriften außer dem Roman „Der Mann ohne Eigenschaften“*. München (Winkler Verl.) 1980, S. 179f.; Giovannini, Elena: *Der Parallel-Krieg. Zu Musils Arbeit in der „Soldatenzeitung“*, in: *Musil-Forum*, 13. und 14. Jg. 1987/88, S. 88 – 99; Robert Musil: *La Guerra Parallela*; mit einem begleitenden Aufsatz von A. Fontanari und M. Libardi. Trento (Biblioteca-Reverdito Editore), 1917. Übersetzung ins Italienische von Claudio Groff; Zöchbauer, Paul: *Der Krieg in den Essays und Tagebüchern Robert Musils* (=Stuttgarter Arbeiten zur Germanistik, Bd. 316) Stuttgart (Verl. Hans-Dieter Heinz, Akademischer Verl.) 1996. その他, Corino, Karl: *Robert Musil*, S. 537では, „Bauernleben“ もムーゼルの書いたものとされている。
- 22) Soldaten-Zeitung, Nr. 39, 4. März 1917, S. 3f.; Musil, Robert: *Leben, Werk, Wirkung*. Reinbek bei Hamburg 1960, S. 265–268
- 23) Giovannini, Elena: *Der Parallel-Krieg*. S. 93